The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大学生の体型認知と痩身願望における性差の規定因の検討 : 知覚と印象認知の視点から
Author(s)	作田, 由衣子; 齋藤, 美穂
Citation	対人社会心理学研究. 2012, 12, p. 121-128
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6264
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大学生の体型認知と痩身願望における性差の規定因の検討 1)

―知覚と印象認知の観点から―

作田由衣子(玉川大学脳科学研究所)
齋藤美穂(早稲田大学人間科学学術院)

若い女性の過剰な痩身願望の原因の一つとして、実際には肥満体型ではないにもかかわらず、自分は太っていると思い込んでしまうことが挙げられている。本研究では、特に評価者の性差に着目して、体型認知の不正確さや体型の魅力評価が痩身願望に影響しているかどうかを、セマンティック・ディファレンシャル法による印象評価やアンケート調査(実験Ⅰ)および調整法を用いた実験(実験Ⅱ)により検討した。まず、実験Ⅰの結果、女性は自分自身の体型は男性と同程度には正確に認知できており、しかも標準体型を最も魅力的だと判断するにもかかわらず、理想とする体型がやせ型であるという矛盾が存在することが明らかになった。また、実験Ⅱからも同様の結果が得られた。女性は男性に比べて実際の体型と理想の体型のずれが大きく、そのことが過剰な痩身願望を引き起こしている可能性が示唆された。

キーワード: ボディ・イメージ、痩身願望、性差、印象評価、体型認知

近年、青年期女子を中心に、神経性食欲不振症(Anorexia Nervosa: いわゆる拒食症)や、神経性大食症(Bulimia Nervosa: いわゆる過食症)といった摂食障害の数が増加している。また、摂食障害とはいえないがダイエットの目的のために食事を抜くなどの不適切な食行動を行う、摂食障害予備群の数も増加している(田崎, 2007)。現代は、痩せている女性が美しいとされる社会的風潮があり、痩せていることは、魅力、成功、自己コントロール、自由といったステレオタイプを生み出し、逆に肥満は、不成功、過食、怠慢、不人気、魅力のなさなどといったステレオタイプを生み出している(Ogden, 2003)。

痩身願望に関する研究の多くは、ボディ・イメージの枠組みの中で行われてきた。ボディ・イメージとは、個人が持つ自己の身体に対する認知であり、通常、実際の身体からはずれが生じてくる。このずれが大きいとき、ボディ・イメージに歪みがあるという(今田, 1996)。例えば女性は男性よりもネガティブなボディ・イメージを持っており(Levine & Smolak, 2002)、自分の体型を実際の体型よりも太く知覚している(Ogden, 2003)とされている。

体型画像を用いたボディ・イメージ測定の代表的研究に、Fallon & Rozin(1985)が挙げられる。大学生男女に、自分自身の現在の体型、理想の体型、異性から最も魅力的だと思われる体型、異性の最も魅力的だと思う体型の太さを評定させたところ、男子学生では、自分自身の現在の体型、理想の体型、異性から最も魅力的だと思われる体型の太さの 3 つに差はみられなかったが、女子学生に関しては、自分自身の現在の体型は理想の体型および異性から最も魅力的だと思われる体型の太さよりも有意に太いと評定された。また、Tiggemann(1994)によれば、女性は自分の身体に対する満足度が低く、自分を太っていると感じ痩せたいと考える痩身願望の強さと、自尊感情の間に有意な負の相関がみられたが、男性はこのような関係がみられなかったと報告された。また、今田(2000)によると、実際には痩せているにもかかわらず、自分を太っていると評価した人は女性の方が男性よりも多く、逆に実際には太っているにもかかわらず、痩せていると評価している人は男性の方が女性よりも多いと報告された。

以上のように、女性は自分の体型をより太っていると知覚するため痩身願望が生じる可能性がある。本研究では、実際に女性において自分自身の体型の知覚自体が正確であるかどうかを確認するため、精神物理学的測定法の 1 つである調整法を用いて、参加者自身の知覚している体型の測定を行った。

また、これまで、シルエット画像を用いたボディ・イメージ研究において、自分自身の現在の体型や理想の体型を選択させる研究は数多く行われてきたが、痩せた体型や太った体型の画像から形成される印象の違いについて詳細に検討した研究報告は少ない。人は顔や人物情報などから自動的にその人物の印象を形成する。そういった印象は、対人行動や社会的判断などにおいて重要な影響を及ぼすことが多くの研究で明らかになってきている。Ogden(2003)が示すように、肥満が不成功や怠慢などのステレオタイプに関わることを考えると、体型から形成される印象がその人物の評価や行動などに影響することは十分考えられる。よっ

て本研究では、体型を段階的に操作したシルエット画像を用いて、体型が与える性格印象について検討することとした。先行研究より、女性の方が男性よりも自分の体型を太く知覚し、体型画像に対しても、太った画像をよりネガティブに評価するのではないかと考えた。

まとめると、本稿では以下の 3 点に焦点を当てて検討し、その実態を明らかにする。まず、シルエット画像から受ける性格印象の評価を行う。2 つ目に、自己と他者に対するボディ・イメージの比較を行う。3 つ目に、実際の体型と、認識している体型のずれについて検討する。以上の点を明らかにするために、2 つの実験を行った。実験 I ではシルエット画像からイメージされる印象の評価および体型に関するアンケート調査を行った。実験 II では実験参加者自身の体型や理想体型の認知について、パーソナル・コンピュータ上のプログラム(Visual Basic)を用いた調整法により検討した。

実験 I： シルエット画像に対する印象評価と体型についてのアンケート調査

シルエット画像からイメージされる性格印象と、それらの印象に評価者の性別が及ぼす影響を検討した。また、自己と他者に求めるボディ・イメージについて調べるため、自分自身の現在の体型、理想の体型、恋人・結婚相手の理想の体型に関するアンケートを実施した。女性の方が男性に比べて痩せた体型を魅力的と評定し、理想的だと考えるだろうと予測した。

方法

実験参加者　首都圏在住の大学生および大学院生 158 名(男性 82 名, 女性 76 名)が実験に参加した。平均年齢は 20.861 歳(*SD*=1.461)であった。

刺激　先行研究(Fallon & Rozin, 1985; Thompson & Gray, 1995)をもとに、5 段階(非常に痩せた、痩せた、標準、太った、非常に太った)に等間隔になるよう調整したシルエット画像を作成した。画像については、大学生および大学院生 30 名(男性 15 名, 女性 15 名、平均 24.821 歳(*SD*=1.813))が参加した予備調査により、体型の操作が成功したことを確認してある。シルエット画像は Figure 1 のように 5 つの画像を横に並べて A4 判の白紙に印刷し提示した。

手続き　実験は以下の 3 つの課題から構成される質問紙を用いて行われた。質問紙は A4 判の用紙に印刷し、提示された。実験者がまず質問紙について説明を行い、参加の同意を得た上で実験を開始した。

【課題 1: 印象評価】Figure 1 に示す男性刺激、女性刺激それぞれ 5 つずつについて、それぞれランダムな順で 1 つずつ刺激を指定し、セマンティック・ディファレンシャル法(SD 法: Osgood, Suci, & Tannenbaum, 1957)により、体型印象について 16 形容詞対、7 段階尺度で評価を求めた。使用した形容詞対は、予備調査により選定された(Table 1)。予備調査では、林(1978)と井上・小林(1985)を参考に 20 種類の形容詞対を選択し、シルエット画像から判断しづらいと思った実験参加者の多かった形容詞対を 4 対削除し 16 対を選定した。

【課題 2: 体型に関するアンケート】実験参加自身の体型や他者の体型についてのアンケートに回答を求めた。項目は以下のとおりである。①現在の自分自身の体型をどう思うかを、太っている、やや太っている、標準的、やや痩せている、痩せているの 5 つから選択を求めた。②今後どうなりたいかを、痩せたい、少し痩せたい、このまま、少し太りたい、太りたいの 5 つから選択を求めた。③ダイエットをしている、または過去にダイエットをしたことがあるかを、はい、いいえから選択を求めた。

【課題 3: シルエット画像の選択】Figure 1 より、①自分自身の現在の体型、②自分自身の理想の体型、③恋人の理想の体型、④結婚相手の理想の体型　それぞれに当てはまるシルエット画像の選択を求めた。

最後に、実験参加者自身の身長と体重について、それぞれ 5cm 刻み、5kg 刻みで回答を求めた。実験参加者のうち、男性 3 名、女性 7 名が無回答であった。

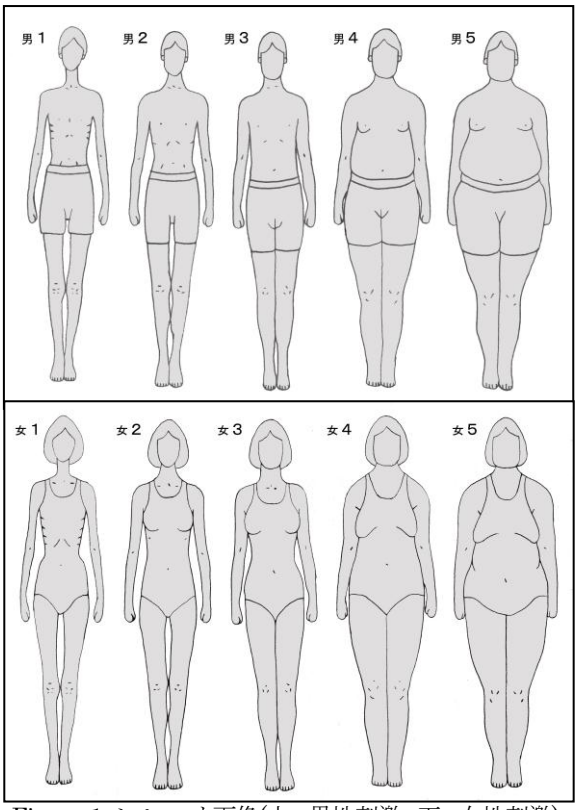

Figure 1 シルエット画像(上: 男性刺激、下: 女性刺激)

結果

分析 1: シルエット画像の印象の分析(課題 1) 課題 1 の印象評定値に対して因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行った。その結果「のんびりした-せかせかした」、「積極的な-消極的な」、「自信のある-自信のない」は、因子 1 および因子 2 の両者の因子負荷量が高かったため、この 3 項目を除外して再度因子分析を行った。その結果 2 因子が抽出され、因子に含まれる形容詞から、第 1 因子は「外見魅力因子」(「おしゃれな-やぼったい」、「美しい-醜い」 など)、第 2 因子は「内面魅力因子」(「心の広い-心の狭い」、「頼もしい-頼りない」など)と命名した(Table 1)。因子間の相関は 0.62 であり、中程度の相関がみられた。

次に、刺激の種類ごとに因子得点を算出し、体型による印象の違いを確認するため、分散分析を行った。さらに、実験参加者の性別により、体型の印象に違いがあるかどうかについても検討するため、刺激ごと、実験参加者の性別ごとに因子得点を算出し、各因子の因子得点に対して、2(実験参加者性別: 男性, 女性) × 2(刺激性別; 男性, 女性) × 5(体型操作; 非常に痩せた, 痩せた, 標準, 太った, 非常に太った)の 3 要因分散分析を行った。因子得点については Table 2 に示す。実験参加者の性別による有意差がみられた箇所にマーキングしてある。

まず、外見魅力因子については、刺激性別要因($F(1, 156) = 32.843$, $p < .001$)、体型操作要因($F(4, 624) = 366.252$, $p < .001$)においてそれぞれ主効果がみられた。また、実験参加者性別 × 刺激性別(F

Table 1 印象評定値に対する因子分析の結果

形容詞対	外見魅力	内面魅力	共通性
おしゃれな–やぼったい	**.820**	-.057	.639
美しい–醜い	**.804**	.117	.734
清潔な–不潔な	**.787**	-.025	.605
敏感な–鈍感な	**.706**	-.516	.479
優秀な–無能な	**.668**	.120	.523
好きな–嫌いな	**.638**	.288	.634
心の広い–心の狭い	-.176	**.734**	.469
頼もしい–頼りない	.077	**.714**	.558
堂々とした–卑屈な	.138	**.659**	.525
幸福な–不幸な	.222	**.659**	.598
親しみやすい–親しみにくい	.118	**.625**	.463
陽気な–陰気な	.127	**.620**	.463
気長な–短気な	-.302	**.574**	.285

Table 2 刺激と実験参加者の性別ごとに集計した因子得点(*M*: 平均、*SD*: 標準偏差)

		外見魅力因子得点					内面魅力因子得点			
		男性評価者		女性評価者			男性評価者		女性評価者	
		M	*SD*	*M*	*SD*		*M*	*SD*	*M*	*SD*
男性画像	非常に痩せた	-0.268	0.632	-0.285	0.681		-1.104	0.673	-1.179	0.651
	痩せた	0.599	0.595	0.689	0.679		-0.004	0.660	0.014	0.769
	標準	0.680	0.553	0.834	0.617		0.521	0.546	0.681	0.509
	太った	-0.426	0.549	-0.510	0.566		0.333	0.692	0.372	0.652
	非常に太った	-0.898	0.599	-1.171	0.655	**	0.282	0.914	0.151	0.872
女性画像	非常に痩せた	-0.169	0.656	-0.275	0.669		-1.005	0.718	-1.234	0.686
	痩せた	0.794	0.722	0.980	0.756	†	0.128	0.720	0.199	0.709
	標準	0.946	0.574	1.024	0.583		0.683	0.508	0.848	0.546
	太った	-0.494	0.591	-0.554	0.559		0.096	0.695	0.173	0.693
	非常に太った	-0.926	0.692	-0.586	0.597	***	-0.053	0.942	0.109	0.790

注) †: $p < .10$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$

(1, 156) = 4.703, $p < .05$)、刺激性別 × 体型操(F(4, 624) = 6.242, $p < .001$)、 実験参加者性別 × 刺激性別 × 体型操作(F(4, 624) = 6.295, $p < .001$)の交互作用もそれぞれ有意であった。

体型操作については、実験参加者性別・刺激性別のすべての組み合わせにおいて、体型操作の主効果が有意であり($ps < .001$)、実験参加者の性別や刺激の性別によらず、ほぼすべての体型間で印象に差がみられた。男性刺激でも、女性刺激でも、最も魅力的と判断されたのは標準体型であり、ほかのどの体型と比べても有意に魅力的とされた。

実験参加者の性別による差がみられたのは非常に太った男性($p < .01$)、痩せた女性($p < .10$)、非常に太った女性($p < .001$)に対する印象であった。女性参加者は男性参加者に比べ、非常に太った男性をよりネガティブに評価し、痩せた女性と非常に太った女性に対してはよりポジティブに評価した。また、刺激の性別との関係から見ると、男性参加者も女性参加者も、痩せた体型に対して、男性刺激より女性刺激をポジティブに評価した($p < .05$; $p < .001$)。標準体型に対しても同様であった($p < .005$; $p < .05$)。

まとめると、女性は非常に太った男性の外見をより魅力的でないと感じるが、非常に太った女性に対する評価はそれほどネガティブではないこと、痩せた体型と標準体型では、男性より女性の方が魅力的と判断されることがわかった。

次に、内面魅力因子についても同様に 3 要因分散分析を行った結果、体型操作要因の主効果(F (4, 624) = 208.294, $p < .001$)および刺激性別 × 体型操作(F (4, 624) = 8.156, $p < .001$)の交互作用がそれぞれ有意であった。単純主効果の検定の結果、すべての体型について、刺激の性別による差がみられた(非常に痩せた: $p < .05$、痩せた: $p < .05$、標準: $p < .01$、太った: $p < .001$、非常に太った: $p < .005$)。太った体型と非常に太った体型は、女性刺激の方が男性刺激よりもネガティブな評価であったが、他の体型についてはいずれも男性刺激の方がネガティブに評価された。

まとめると、内面魅力については実験参加者の性別による差はみられなかった。太った体型では女性刺激の方が魅力が低く、痩せた体型では男性刺激の方が魅力が低く評価された。刺激および実験参加者の性別にかかわらず、外見魅力で最も得点が低かったのは非常に太った体型であったのに対し、内面魅力得点が最も低かったのは非常に痩せた体型であった。

分析 2: 体型についてのアンケート結果(課題 2)　自分自身の現在の体型と理想の体型およびダイエット経験についての集計結果を Table 3 に示す。人数が 0 になるセルがあったため、現在の自分の体型(①)については「痩せている」と「やや痩せている」をまとめて「*痩せ型*」、「やや太っている」と「太っている」をまとめて「*太め型*」とし、今後どうなりたいか(②)については「痩せたい」と「少し痩せたい」をまとめて「*痩せたい*」、「少し太りたい」と「太りたい」をまとめて「*太りたい*」とし、以下の分析を行った。まず、現在の自分の体型(①)について、2(参加者性別; 男性, 女性)×3(判断カテゴリ; 痩せ型, 標準, 太め型)のクロス集計表についてχ^2 検定を行ったところ、度数のばらつきは有意ではなかった(χ^2 (2, N = 158) = 3.155, *n.s.*)。次に、②今後どうなりたいかについて同様に 2(性別; 男性, 女性) × 3(判

Table 3 体型についてのアンケート集計結果(課題 2)

	男性参加者				女性参加者			
	度数	%	調整済み残差		度数	%	調整済み残差	
①現在の自分の体型をどう思いますか？								
痩せ型	25	30.5	1.758		14	18.4	-1.758	
標準	28	34.1	-0.525		29	38.2	0.525	
太め型	29	69.5	-1.036		33	73.7	1.036	
②今後どうなりたいですか？								
痩せたい	39	47.6	-4.261	**	61	80.3	4.261	**
そのまま	24	29.3	2.237	*	11	14.5	-2.237	*
太りたい	19	23.2	3.189	**	4	5.3	-3.189	**
③ダイエットをしていますか？								
はい	17	20.7	-4.172	**	40	52.6	4.172	**
いいえ	65	79.3	4.172	**	36	47.4	-4.172	**

注)　*: $p < .05$, **: $p < .01$

Table 4 シルエット画像の選択数とχ^2検定結果(課題 3)

	男性参加者				女性参加者			
	度数	%	調整済み残差		度数	%	調整済み残差	
自分自身の「現在」の体型								
非常に痩せた	2	2.5	-0.065		2	2.7	0.065	
痩せた	28	35.0	1.498		18	24.0	-1.498	
標準	38	47.5	-1.896		47	62.7	1.896	
太った	12	15.0	0.804		8	10.7	-0.804	
自分自身の「理想」の体型								
痩せた	31	38.8	-4.220	**	56	73.7	4.220	**
標準	49	61.3	3.941	**	20	26.3	-3.941	**
恋人の「理想」の体型								
痩せた	28	35.0	-1.077		33	43.4	1.077	
標準	52	65.0	1.077		43	56.6	-1.077	
結婚相手の「理想」の体型								
痩せた	22	27.5	0.306		19	25.3	-0.306	
標準	58	72.5	-0.478		56	74.7	0.478	

注) **: $p < .01$

断カテゴリ; 痩せ願望, そのまま, 太り願望)のクロス集計表についてχ^2 検定を行ったところ、度数のばらつきは有意であった (χ^2 (2, N = 158) = 19.251, $p < .01$)。調整済み残差を求めたところ、痩せたいと回答した女性は期待度数より有意に多く、男性は少なかった($p < .01$)のに対し、そのままか太りたいと回答した男性は多く、女性は少なかった(ps < .01)。③ダイエット経験についても 2(性別; 男性, 女性) × 2(判断カテゴリ; はい, いいえ)のχ^2 検定を行ったところ、度数のばらつきは有意であった(χ^2(1, N=158) = 17.405, $p < .01$)。調整済み残差より、ダイエット経験があると答えた女性は多く、男性は少なかった($p < .01$)。

また、①現在の自分の体型と②今後どうなりたいかの回答の関連性について検討するため、スピアマンの順位相関係数を算出したところ、男性参加者においては r = .825、女性参加者においては r = .649 であった。したがって、現在太っていると感じている人は、今後痩せたいと思っていることが示された。

分析 3: シルエット画像の選択数(課題 3) 最後に、自分自身の現在の体型と理想の体型、恋人と結婚相手の理想の体型としてそれぞれ選択したシルエット画像について集計した(Table 4)。回答が 0 の箇所がいくつかみられたため、分析 2 と同様判断カテゴリをまとめて以下の分析を行った。

項目ごとに、性別 × 判断カテゴリのクロス集計表についてχ^2 検定を行ったところ、自分自身の理想の体型についてのみ、度数のばらつきが有意であった(χ^2 (1, N=158) = 20.018, $p < .01$)。調整済み残差を求めたところ、男性は「痩せた」が少なく「標準」が多かったのに対し、女性は「痩せた」が多く「標準」が少なかった(ps < .01)。以上の結果より、痩せた体型を理想とする女性の痩身願望が確認された。

さらに、実験参加者自身の体重と選択されたシルエットとの間の関連性について検討するため、相関係数を算出したところ、男性でも女性でも、体重と現在の体型との間に中程度の正の相関がみられた(r = .529; r = .525)。つまり、体重が重い人ほど、現在のシルエットとして太めの体型を選ぶ傾向にあった。体重と理想の体型との間には相関はみられなかった。

考察

まず、シルエット画像に対する印象について分析を行った結果、外見魅力と内面魅力の 2 因子が抽出された。外見魅力は身体的魅力、内面魅力は社会性や親しみやすさなどの評価と関連すると考えられる。Ogden(2003)の指摘する、痩せていることは成功、肥満は怠慢などのステレオタイプと関連するのは内面魅力因子であろうが、体型ステレオタイプと魅力との関係については今後さらに詳細に検討する必要がある。画像から感じる印象が実験参加者の性別によって異なるのは外見魅力に関する印象(「おしゃれな-やぼったい」、「美しい-醜い」など)のみであり、内面魅力に関する印象(「心の広い-心の狭い」、「頼もしい-頼りない」など)は男女で共通していた。

課題 2 の結果より、女性と男性で、自分を標準もしくはやや太っていると判断した人の割合に差はなかった。女性は今後今よりも痩せたいと回答した人が多かった

が、男性は今よりも太りたいという回答が多かった。また、課題 3 で、現在の体型と理想の体型として選択されたシルエット画像より、女性は理想として「痩せた」体型を、男性は「標準」体型を選択した。以上のように、女性の方が痩身願望が高いことが確認された。また、実験参加者自身の体重と現在の体型として選択されたシルエットとの間には中程度の相関がみられ、体重が重い人ほど現在の体型として太めの体型を選ぶ傾向にあった。したがって、男性も女性も、自分の体型に関して実際の体型と極端に異なる認識をしているわけではないことが示唆された。しかし、ここで用いた指標は 5kg 刻みの体重のみであったため、あくまでも大まかな目安としてとらえる必要がある。

以上のように、男性と女性で現在の自分の体型の選択に差がなかったことから、女性が必ずしも自分を太っていると認知しているわけではないにもかかわらず、何らかの理由でより痩せたいと思っていることが示唆される。実験 I ではシルエット画像に対して印象判断と体型判断を行ったが、自分自身の体型をどう知覚しているかについてより直接的に検討するために、実験 II では、実験参加者自身の全身画像を用いて、自分の体型や他の対象のサイズを正確に知覚できているかどうかを検討した。

実験 II：ボディ・イメージ評価実験

実験参加者自身の全身画像を用いて、自分自身の体型に対する知覚(ボディ・イメージ)の歪みを検討した。実際の体型と理想の体型についてそれぞれ判断させるとともに、普段目にする 350ml の缶の太さについても同様に判断させ、太さの判断そのものが不正確であるのか、自分自身の体型の判断についてのみ不正確であるのかを検討した。

方法

実験参加者　首都圏在住の大学生および大学院生 60 名(男性 30 名・女性 30 名)が実験に参加した。平均年齢は 21.450 歳($SD = 2.228$)であった。

刺激　実験参加者の全身画像をデジタルカメラ(CASIO EXILIM EX-Z300)で撮影し、パーソナル・コンピュータ(SONY VAIO VGN-NW51FB、OS: Windows7)に取り込んで使用した。服装の影響を避けるため、実験参加者には全員同一のグレーの T シャツおよびショートパンツを着用させた。撮影時は、実験参加者の輪郭をはっきりさせるため、背景には黒いカーテンを用いた。画像は Adobe PhotoShop7.0 を使用し、人物を中心に 200 × 600 ピクセルの大きさに加工した。

手続き　実験参加者自身の画像を Visual Basic 6.0 を用いて作成した身体心像測定プログラム(田崎・瀬戸山・今田, 2007)[2]内に読み込んで提示し、各質問項目に対して画像の体型(横幅)の調節を求めた。モニタの中央に全身画像が提示され、その下に質問項目と調節バーを表示した。質問項目は以下の 3 項目であった。

①「あなたの現在の体型だと思うところまで、大きさを調節してください」

②「あなたの理想の体型だと思うところまで、大きさを調節してください」

③「350ml の缶の大きさだと思うところまで、大きさを調節してください」

各質問項目について、4 試行ずつ行った。実験の際は明らかに細い画像を提示して太くしていく上昇系列と、明らかに太い画像を提示して細くしていく下降系列を設定した。半数の実験参加者は下降、上昇、下降、上昇の順で、もう半数の実験参加者は上昇、下降、上昇、下降の順で実験を行った。試行と試行の間には 10 秒間の間隔を設けた。現在の体型の値を 100 とし、実際よりも体型を細く感じていれば 100 未満、太く感じていれば 100 以上になるよう数値を設定した。質問項目の順序は、①と②についてはランダマイズしたが、③は常に最後に行った。

結果

条件ごとに平均値を算出した(Figure 2)。x 軸の左からそれぞれ「現在のあなたの体型だと思うところまで、大きさを調節してください(以下「現在」と略記)」、「あなたの理想の体型だと思うところまで、大きさを調節してください(「理想」)」、「350ml の缶の大きさだと思うところまで、大きさを調節してください(「缶」)」についての集計結果(平均値)を示す。理想体型を実際よりも男性は太く、女性は細く推定した。実際の太さ(100)との差に

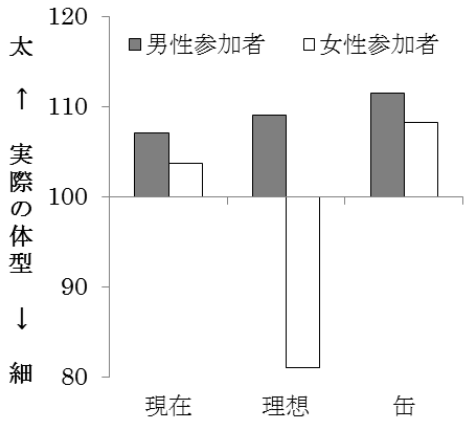

Figure 2 実際の体型(横幅)を 100 としたときの体型推定の平均値

ついて、参加者性別ごと、項目ごとに t 検定を行った。その結果、女性は理想体型を実際よりも細く推定する傾向がみられた($t(29) = 1.573$, $p < .10$)。缶は男女ともに実際よりも太く推定する傾向がみられた($t(29) = 1.394$, $p < .10$; $t(29) = 1.314$, $p < .10$)。

また、太さの推定値について、2(参加者性別; 男性, 女性) ×3(項目; 現在の体型, 理想の体型, 缶の大きさ)の 2 要因分散分析を行った。その結果、参加者性別($F(1, 58) = 30.715$, $p < .001$)および項目($F(2,116) = 36.953$, $p < .001$)においてそれぞれ主効果がみられた。また、参加者性別と項目の交互作用も有意であった($F(2, 116) = 32.298$, $p < .001$)。単純主効果の検定の結果、理想の体型に対する判断において、参加者性別により有意差がみられた($p < .001$)。男性参加者よりも女性参加者の方が理想の体型を有意に細く調節した。また、女性参加者は、現在の体型と缶の大きさに比べ、理想の体型を有意に細く推定した($ps < .001$)。

考察

自分自身の全身画像を現在の体型や理想の体型になるまで調節させたところ、理想の体型においては男女間で有意な差がみられたが、現在の体型においては男女間で有意な差はみられなかった。これまでの研究で、女性は自分自身を太っていると思い込むというバイアスがあり、そのために痩せなければならないと思い、様々なダイエットに取り組む(田崎, 2007)と報告されたが、本研究はそれらの研究とは一部異なる結果となった。女性の理想の体型が男性よりも著しく細かったことから、理想と現実のずれが男性よりも大きく、このずれを解消するために過剰なダイエットを行ってしまう可能性が考えられる。

また、今回の実験では、統制条件として缶の太さを推定させたが、男女ともに実際よりもやや太めに推定する傾向がみられた。現在の体型の推定については、男女ともに実際の太さと有意差がみられなかったことから、自分の体型は缶に比べて日常的に目にしており、また、関心も高いため、より正確に判断されたと考えられる。

総合考察

本研究では、全体を通して、女性は男性に比べて痩身願望が強いことがわかった。この結果は、これまでの先行研究(e.g., Fallon & Rozin, 1985)と一致する。

シルエット画像に対する印象評価については、外見魅力因子と内面魅力因子が抽出された。外見魅力・内面魅力ともに高く評価されたのは標準体型であった。女性の 70%は理想体型として痩せた体型を選択したにもかかわらず、痩せた体型よりも、標準体型の方が外見魅力因子・内面魅力因子ともに高い評価を得たという結果には矛盾が生じている。その原因の 1 つとして、女性は標準体型が最も良いことは潜在的には理解しているが、例えばテレビや雑誌などの痩せを賞賛するメディアの影響などを受け、痩せた体型になりたいと感じていることが考えられる。

これまでの研究で、痩身願望において男女差が報告されているため、さまざまな体型に対する魅力の認知においても男女差がみられるのではないかと推測した。本研究では、シルエットから判断される外見魅力には有意な男女差が存在するが、内面魅力は男女差が存在せず、共通していることが示唆された。

これまで、定量的に操作した体型画像を用いて体型認知の正確さなどを検討した研究はあるが、体型に対する魅力を詳細に検討したものはほとんどみられない。本研究より、人は体型に対しても自動的に外見のみならず内面的な魅力までも推定することが示された。Ogden(2003)が指摘した、体型ステレオタイプが印象判断にも影響していると考えられる。

また、参加者自身の全身画像を用いた実験Ⅱより、女性も男性も自分自身の体型をほぼ正確に推定することができるが、女性は理想体型が実際の体型と比べて細いことが示された。したがって、女性の方が男性に比べて理想体型と実際の体型との差が大きいため、この差を解消するために過剰な痩身願望が生じ、ダイエット行動に結びつく可能性が示唆された。

これまでの研究で、女性は自分を太っていると感じるという誤った認識があるためにダイエットに取り組むと考えられてきたが、本研究では、自分の体型の認知の正確さには女性と男性で差はないにもかかわらず、女性の理想体型が男性に比べて著しく細いという結果が得られた。したがって、女性は必ずしも自分自身の体型を男性に比べて不正確に認知しているわけではなく、女性の痩身願望は単にボディ・イメージの歪みから来るものではないことが示唆された。

女性の痩身願望が生まれた背景には、メディアの影響が非常に大きいと考えられる(e.g., Silverstein, Perdue, Peterson, & Kelly, 1986)。現代社会では、タレントやモデルのようなスタイルが理想の女性像であり、痩せることが良いことというイメージを与え、ダイエットを奨励しているメディアや雑誌によって理想体型のバイアスが生み出されている可能性がある。そのため、特に女性において実際にダイエットをしたことがある(している)人が大半を占め、「痩せ志向」に拍車がかかっている(渡辺・山沢・佐竹・松井・真鍋・上野・大森, 1997)。そして、痩身願望やストレスなどの心理的要因やダイエットをきっかけに摂食障害に陥る事例が多く報告さ

れている(厚生労働科学研究, 2005)。よって、メディアなどから得られる情報への依存度を低減させ、自分自身の美的価値観を確立させることが過剰な痩せ願望を防止することにつながると期待できよう。

本研究では、精神物理学的アプローチや感性認知の観点を加えることにより、これまで未検討だった、痩身願望における知覚や魅力の影響について新しい知見を得ることができた。本研究では健常者を対象としたが、今後は、摂食障害の患者を対象とし、同様の実験を行うことにより、痩身願望を持つ健常者と摂食障害患者の体型認知の共通点と相違点を明らかにすることができるだろう。

引用文献

Fallon, A. E., & Rozin, P. (1985). Sex differences in perceptions of desirable body shape. *Journal of Abnormal Psychology*, **94**, 102-105.

林　文俊(1978). 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **25**, 233-247.

今田純雄 (1996). 青年期の食行動　中島義明・今田純雄(編) 人間行動学講座2　たべる―食行動の心理学― 朝倉書店 pp. 114-131.

今田純雄(2000). 肥満という痛み　岡堂哲雄・上野矗・志賀令明(編) 現代のエスプリ別冊　病気と痛みの心理 至文堂 pp. 126-134.

井上正明・小林利宣(1985). 日本における SD 法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観 教育心理学研究, **33**, 253-260.

厚生労働科学研究(こどもの家庭綜合研究事業、思春期やせ症と思春期の不健康やせの実態把握および対策に関する研究班)(2005). 思春期やせ症の診断と治療ガイド, 文光堂

Levine, M. P., & Smolak, L. (2002). Body image development in adolescence. In Cach, T. F. & Pruzinsky, T. (Eds.) *Body image: a handbook of theory, research, and clinical practice*. New York: The Guilford Press. pp.155-162.

Ogden, J. (2003). *The psychology of eating: from health to disordered behavior*. U.S.: Blakwell Publishers.

Osgood, C. E., Suci, G. J., & Tannenbaum, P. H. (1957). *The measurement of meaning*. University of Illinois Press.

Silverstein, B., Perdue, L., Peterson, B., & Kelly, E. (1986). The role of the mass media in promoting a thin standard of bodily attractiveness for women. *Sex Roles*, **14**, 519-532.

田崎慎治 (2007). 女子大学生における痩せ願望と自己評価および自己受容の関連 広島大学大学院教育学研究科紀要, **56**, 39-47.

田崎慎治・瀬戸山裕・今田純雄 (2007). 食の問題行動に関する臨床発達心理研究(5)―Visual Basic6.0を用いた身体心像測定プログラム開発― 広島修大論集, **47**, 263-292.

Thompson, M. A., & Gray, J. J. (1995). Development and validation of a new body image assessment scale. *Journal of Personality Assessment*, **64**, 258-269.

Tiggemann, M. (1994). Gender differences in the interrelationships between weight dissatisfaction, restraint, and self-esteem. *Sex Roles*, **30**, 319-330.

渡辺周一・山沢和子・佐竹泰子・松井信子・真鍋良子・上野良光・大森正英(1997). 青年期女子の体重観と日常生活 東海女子短期大学紀要, **23**, 91-105.

註

1) 本研究は、野下佳那子の平成 21 年度早稲田大学人間科学部卒業論文を再分析し、再構成したものである。実験データを提供してくれた野下佳那子氏および実験に協力してくださった早稲田大学人間科学部の学生に感謝いたします。

2) 実験プログラムを提供してくださった田崎慎治氏に感謝いたします。

Possible cause of the gender differences regarding recognition of body and desire to be thin:

On the aspect of perception and impression of body shape

Yuiko SAKUTA (*Tamagawa University Brain Science Institute*)
Miho SAITO (*Faculty of Human Sciences, Waseda University*)

One of the reasons for young women's desire to be thin has been suggested that they tend to think themselves fat regardless of their real shape. The current study examined the effect of inaccurate perception and subjective attractiveness of body shape on the drive for thinness by using semantic differential method, questionnaire regarding body shape (Experiment 1), and method of adjustment (Experiment 2) with focusing on the gender difference. As the results, women recognized their own shapes correctly as well as men did and they judged standard body shapes, not thin shapes, as the most attractive, whereas they desired to be thin. The second experiment revealed converging results. Thus it is suggested that the large disparity between real body shape and desired body shape in women would cause the strong drive for thinness.

Key words: body image, drive for thinness, gender difference, impression judgment, body perception.